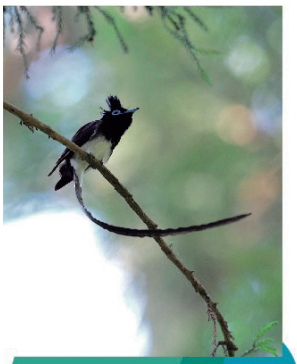
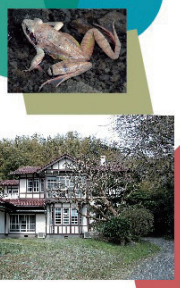
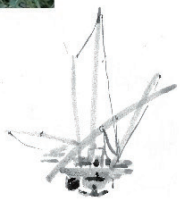
ダイジェスト版〈ココが見どころ〉

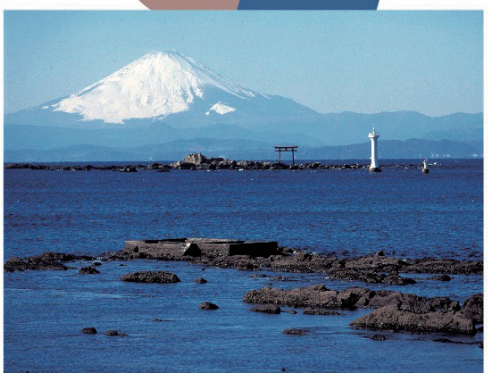






町制施行90周年記念

葉山町の歴史とくらし



町制施行90周年記念

葉山町の歴史とくらし

葉山町

町制施行90周年記念　葉山町の歴史とくらし

目次（青数字はこのダイジェスト版ページ）

ごあいさつ…3
発刊によせて…4
目次…5・2
凡例…8・4
年表目次…9・5

葉山再発見

葉山の位置…12・6
「葉山の富士山」と堀口大學…14・6
海から見た葉山と対岸の景色…16・6
写真に見る御用邸の歴史　その1…18・7
今に残る葉山の棚田…20・7
歴史を刻む葉山のたてもの…22・7
葉山の野鳥…24・8
葉山の美味しい魚介類…26・8
葉山の海辺の生物…28・8
葉山の野草の四季…30・9
里山のいきもの…32・9
ちょっと昔の葉山のくらし（古民具）…34・9

小字・小地名マップ・10

小字・小地名マップ――一色地区…40
小字・小地名マップ――堀内地区…42
小字・小地名マップ――長柄地区…44
小字・小地名マップ――木古庭地区…46
小字・小地名マップ――上山口地区…48
小字・小地名マップ――下山口地区…50

原始・古代・10

葉山町の地質・地形…54・10
遺跡にみる葉山――縄文時代…56・10
遺跡にみる葉山――弥生・古墳時代…58・11
長柄桜山古墳群…62・11
記紀にみるヤマトタケル東征と葉山…64・11
御浦郡（美宇良郡）と葉山…66・12
遺跡にみる葉山――古代…68・12
三浦氏台頭期の葉山（平安末期）…70・12

中世・13

三浦半島の中世…74・13
『吾妻鏡』にみる葉山地域…76・13
鎌倉・室町時代の長江氏と葉山地域…78・13
貴重本『小田原衆所領役帳』写本を発見…82・14
木古庭郷の領主闕落と郷村百姓…84・14
豊臣政権との戦い…86・14
江戸時代前夜の葉山（近世の幕開け）…88・15

近世・15

めまぐるしく代わった6ヵ村の支配…92・15
各村の自治組織――名主変遷と五人組…94・15
三浦半島の人馬継立――苦しい村民負担…100・16
入会地・漁場をめぐる隣村とのいさかい…102・16
「高室院登山帳」にみる葉山…104・16
江戸時代の年貢――元禄検地前後の村高…108・17
江戸時代の相模国絵図にみる三浦半島…112・17
江戸時代中期の堀内葉山家絵図…114・17
自然災害による浜道消失・三崎道迂回など…116・18
葉山を通る「浦賀道」と高札…118・18
堀内村の岡濱騒動と三ヶ浦村…124・18
さまざまな講と石塔…126・19
三浦半島北部のまとめ役だった「堀内村」…128・19
『相中留恩紀畧』にみる天保頃の葉山名所…130・19
江戸時代後期の葉山の河川工事…134・20
沼田家絵図にみる下山口村…136・20
江戸時代と明治期の葉山の農水産物…138・20
江戸時代から明治期の漁業…142・21
村々の生業と農間商い渡世（幕末から明治初期）…144・21
葉山の家紋…148・21
葉山の屋号…150・22
幕末三浦半島の海防体制と葉山…154・22

近代・22

明治維新とあらたな葉山（新地方行政）…160・22
コレラの大流行と葉山…162・23
明治15年の6ヵ村地図と堀内村切図…164・23
明治期の葉山の住宅…166・23
江戸時代以降の人口のうつりかわり…168・24
寺子屋から続く葉山の学校…170・24
明治になると別荘時代が到来（別荘1）…174・24
起業家鈴木三郎助…178・25
葉山御用邸の造営…180・25
葉山の交通発展の歴史…182・25
横須賀海軍工廠に通った葉山の人々…184・26
要塞地帯法と葉山のくらし…186・26
日英同盟に向けた一色での「葉山会議」…188・26
御用邸造営頃からの道路網整備…190・27
葉山港「日本ヨット発祥の地」の石碑…192・27
新たに発見された古文書…194・27
写真に見る御用邸の歴史　その2…196・28
葉山御用邸水源地施設の完成…198・28
日蔭茶屋事件――文学にみる歴史…200・28
葉山御用邸附属邸と南邸…202・29
大正関東地震直前の堀内海岸地区の詳細地図…204・29
大正関東地震（関東大震災）時の葉山…206・29
葉山村から葉山町へ（町制施行）…210・30
昭和は葉山から――昭和天皇附属邸で践祚…212・30
昭和天皇ご採集の海洋生物…214・30
新富裕層による別荘ブーム（別荘2）…216・31
第二次世界大戦と葉山…220・31
昭和22年の米軍撮影空中写真…226・31

現代・31

各時代の葉山の商店街…228・32
頼朝以来の別荘地・海水浴場の葉山…232・32
東京オリンピックと葉山…234・32
新しいイベントの創設…236・33
草津町と豪州の市との姉妹都市提携…238・33
葉山町における大規模団地の開発…240・33
御用邸焼失と10年後の再建…244・34
協働への試み――新たな町民活動盛んに…246・34
町の公共施設…248・34
葉山に住んだ文学者・音楽家・画家たち…250・35

寺社・教会・伝説など・35

葉山の神社――受け継がれる祭りや神事…254・35
葉山の寺――修験、一家二寺制など…258・35
葉山教会とイエズス孝女会葉山修道院…262・36
猪俣・岡部、平兼盛五輪塔の伝承…264・36
海辺の伝説　山辺の伝説…266・36

石碑・歴史巡りマップ・37

石碑いろいろ…272・37
歴史巡りマップ――一色地区…276・37
歴史巡りマップ――堀内地区…278
歴史巡りマップ――長柄地区…280
歴史巡りマップ――木古庭地区…282
歴史巡りマップ――上山口地区…284
歴史巡りマップ――下山口地区…286

編さん関係者・参考文献一覧・37

編さん関係者…290
参考文献…291
奥付…296・37

凡例

- 「　」内は強調、固有名詞、引用文、読み下し文等。
- 原則として固有名詞は常用漢字に変換しました。
- 図版等の出所先はキャプション（　）内に記載。
- 脚注には、出典、用語解説等を載せました。本文は、原則右下脚注（※印）、年表ページでは、左下脚注に（❖印）で年表の出典を明らかにしました。
- □は引用史料などで、判読不能な文字。
- 本文中の年号は、原則として和暦（西暦）と表しましたが、近代以降は西暦のみの場合もあります。
- 本書の編集に際し、歴史的な背景や事実を正しくお伝えするために、引用等に当時の用語を使用している箇所もありますが、ご理解いただきますようお願いいたします。

年表掲載ページ（本文ページ）

表	時代	和暦	西暦	ページ	※
1	縄文 以前			…57	…10
2	弥生～古墳		～ 646	…61	…11
3	飛鳥～奈良～平安	持統天皇 6 ～康平 6	692 ～ 1063	…67	…12
4	平安	永保 3 ～治承 4	1083 ～ 1180	…71	…12
5		治承 5 ～文治 5	1181 ～ 1189	…75	…13
6	鎌倉	建久 3 ～承久 3	1192 ～ 1221	…77	…13
7		貞応 3 ～宝治年間	1224 ～ 1248	…79	…13
8		建長 5 ～元弘 3	1253 ～ 1333	…81	…13
9	南北朝～室町	延元元／建武 3 ～応仁 2	1336 ～ 1468	…83	…14
10	室町	明応 4 ～弘治 2	1495 ～ 1556	…85	…14
11	安土・桃山	永禄 2 ～天正 18	1559 ～ 1590	…87	…14
12		天正 18 続～慶長 3	1590 ～ 1598	…89	…15
13	江戸	慶長 5 ～延宝 4	1600 ～ 1676	…103	…16
14		元禄元～寛延 2	1688 ～ 1749	…111	…17
15		明和 9 ～文政 12	1772 ～ 1829	…141	…20
16		天保 4 ～慶応 3	1833 ～ 1867	…147	…21
17	明治	慶応 4 ～明治 4	1868 ～ 1871	…161	…22
18		明治 5 ～ 9	1872 ～ 1876	…173	…24
19		明治 10 ～ 19	1877 ～ 1886	…179	…25
20		明治 20 ～ 25	1887 ～ 1892	…183	…25
21		明治 25 続～ 32	1892 ～ 1899	…185	…26
22		明治 32 続～ 40	1899 ～ 1907	…189	…26
23	明治・大正	明治 40 続～大正 6	1907 ～ 1917	…199	…28
24	大正	大正 8 ～ 14	1919 ～ 1925	…203	…29
25	昭和	昭和元～ 6	1926 ～ 1931	…209	…29
26		昭和 7 ～ 15	1932 ～ 1940	…211	…30
27		昭和 16 ～ 20	1941 ～ 1945	…213	…30
28		昭和 20 続～ 24	1945 ～ 1949	…215	…30
29		昭和 24 続～ 30	1949 ～ 1955	…223	…31
30		昭和 31 ～ 39	1956 ～ 1964	…231	…32
31		昭和 39 続～ 43	1964 ～ 1968	…233	…32
32		昭和 44 ～ 48	1969 ～ 1973	…235	…32
33		昭和 48 ～ 55	1973 ～ 1980	…239	…33
34		昭和 56 ～ 62	1981 ～ 1987	…243	…33
35	昭和・平成	昭和 63 ～平成 6	1988 ～ 1994	…245	…34
36	平成	平成 7 ～ 11	1995 ～ 1999	…247	…34
37		平成 12 ～ 18	2000 ～ 2006	…249	…34
38		平成 19 ～ 26	2007 ～ 2014	…269	…36

※このダイジェスト版では、各項目末尾に年表の所在を表示しています。

自然とくらし

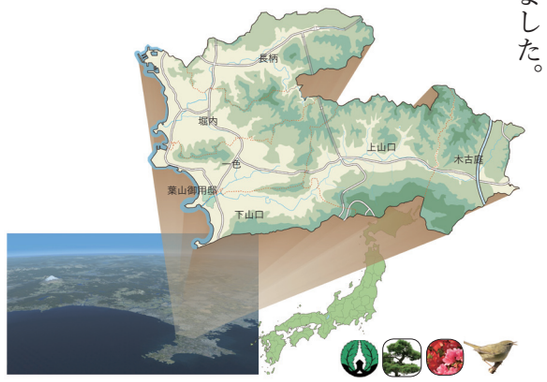
葉山再発見

御用邸・棚田・生物・民具

葉山の位置

葉山町の基本情報、各地区の読み方、葉山町の町章、木、花、鳥を紹介しています。また、「選ばれた葉山」というリストで、これまでに50選や100選に選ばれた葉山町の「おすすめ」「見どころ」を紹介しました。

選ばれた葉山リスト



「葉山の富士山」と堀口大學

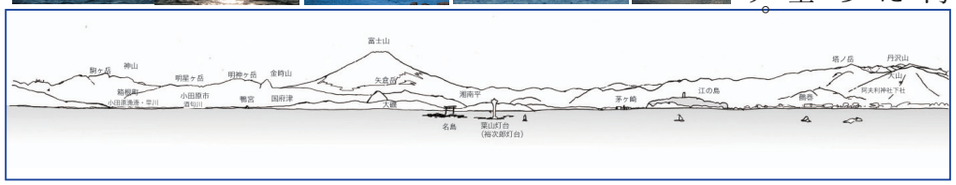
葉山町の名誉町民で詩人の堀口大學が、毎日、日課としていた森戸海岸への散歩。森戸海岸から眺めた富士山の魅力を、一篇の詩に表しました。

海越しに見える富士山は、三浦半島西海岸の葉山ならではのもので、夕焼けの富士山も町民の誇りです。

また、堀口大學作詞、團伊玖磨作曲による「葉山町歌」も、葉山町の宝です。

海から見た葉山と対岸の景色

相模湾に面した葉山ならではの全風景です。



写真に見る御用邸の歴史　その1

明治27年（1894）1月に造営された当時の御用邸で、現在の行幸道路が正門につながる前は、一面の田でした。2年後、下山川南の徳川茂承侯爵（紀伊徳川家）から買い入れた「南御用邸」の総地図と後に買い増された「相州葉山御用邸総図」を掲載しています。

今に残る葉山の棚田

平成21年（2009）新春、朝日新聞創刊130周年記念事業「にほんの里100選」（神奈川県2ヵ所）に「上山口」が選定されました。上山口（しょうぎんの里の昭和30年代と現在の棚田（千枚田）をご覧下さい。存続の危機を乗り越えてボランティアグループとともに毎年の豊かな実りを迎えています。

歴史を刻む葉山のたてもの

古いたてものが次々に消えていく中で残っているこれらの建築は、華やかなりし葉山の別荘時代を思い起こさせます。旧東伏見宮別邸のイエズス孝女会修道院旧館、老舗日影茶屋、旧小田良治別邸の元鹿島研究所、中央大学葉山寮、旧足立正別邸を紹介しています。

葉山の野鳥

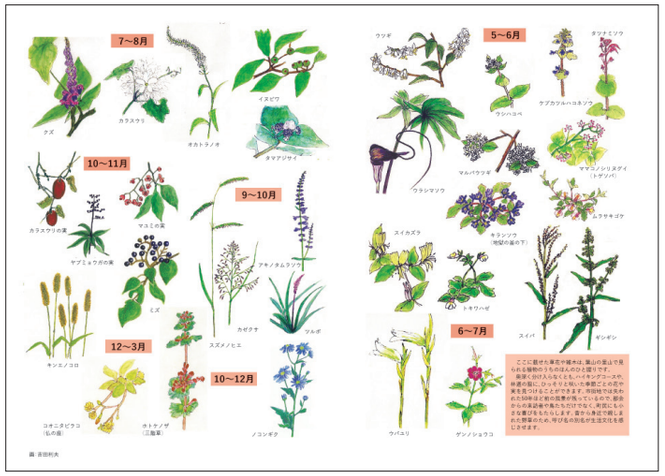
葉山は海と丘陵地に囲まれ、恵まれた自然環境にあります。特に二子山や大楠山から続く山林や谷戸は面積も広く、首都圏では貴重な存在です。森戸川上流域の山林には珍しいサンコウチョウ、オオルリなどが渡来し、近年は野鳥の観察に訪れる人が増えています。

葉山の美味しい魚介類

葉山のまわりは磯がいっぱいあります。磯には たくさんの生物が集まり、名島周辺の磯場はいろいろな種類の魚介類が集まってきます。家庭の食卓によくのぼる魚類の多種が集まります。沖合の岩礁はコシ（潮）の流れが多く集まってきます。24時間で2回満潮とされた。最近では昭和30年代に入り、生息場所がなくなってしまいました。いきものの一番の天敵は自然界より人間と海であることを忘れてはいけません。

ブリの若魚（イナダ）
カツオ
マアジ
マサバ
タイの仲間
マダイ
イシダイ
クロダイ
シラス
サヨリ
マダコ
アオリイカ
イセエビ
たくさんとれる魚介類
カタクチイワシなどの稚魚。葉山では通常が中況冬下しかつも形に入ります。
海藻が豊かな葉山では海藻を食べるケガニ。ケガニは高級食材として空かやなり高値です。
深い海の岩礁などに棲み、あちこち歩きまわります。伝説としてケガニ・ボーイ。伝説にいろいろなケガニ。
暖かい夏にかけ、産卵にかけて卵巣を蓄えるメスが多く産まれます。
産卵の時期に卵巣が多くあるので、この時期たくさんとれます。
葉山の海にはイセエビもいっぱいあります。ただ、葉山ではエビ類は、7月は産卵期で禁漁です。
ヒジキ
ワカメ
海藻
地元で味わえるところでんや東天の材料です。のこらんで切干しをくて温して、出しなったものを乗せて使います。
平春の浜辺にはワカメやヒジキそしの光景が、よくみられます。ワカメがしゃぶしゃぶやメカブのたたきは地元ならではのごちそうです。
魚たち
カサゴ
スズキ
マイワシ
沿岸の岩礁や海中岩などに棲みます。葉山地域ではかるく、美しなるとと網を張ってあります。
葉山に来味しい魚です。最近は一年中入荷。浜や船釣場などからの釣り竿りでも釣れる。出漁魚です。
近くは鎌倉山などでカツオ漁を行っていた漁師が、鎌とするマイワシをもとめてたどりついた場所のひとつが三浦海岸であり、葉山の漁師たちの起源のひとつとも言われています。
メジナ
ネズミゴチ
シロギス
幼魚のうちは群色の模様。成魚は黒模様が強いのですが現釣りの対象魚として人気が高く、葉山周辺でも一年中高いかけているマニアが多いです。
ネズミ型ちょっと釣れる魚です。メルルルが関連されますが、江戸前天ぷらの定ないれ、夏場が美味しいです。
葉山の海岸から沖に向かって仕掛けを投げて、は近一年中獲物を期待できます。切は魚、鯛のまわりにたきいキスがいます。
メバル
カワハギ
マコガレイ
ヒラメ
全身黒褐色で、海岸近くの海藻の多い岩礁周辺に釣れるなどして棲息しています。
巨魚の見び出た魚。流れ速や海藻の中で棲み魚物は、海底生活に寄り、長やコイ、ヒラメ等べてえさくります。
カレイのうち一番味がよいです。切魚に寄って目だけ「頭を見なから切ってい、最後はハリと強いふんでいます。
夏でも、釣が様くほど大食が多いの時期が来ると、年に数回、産卵活のような光物に出がられたという特を聞きます。

葉山の野草の四季



これらの草花や雑木は、葉山の里山で見られる植物のほんのひと握りですが、ハイキングコースや林道の脇に、ひっそりと咲く季節ごとの花や実を見つけることができます。呼び名の別名にもご注目下さい。

葉山の海辺の生物

相模湾に面して、およそ4キロにわたる葉山町の海岸は、岩礁、転石、砂浜と複雑な海岸地形をもち、多種多様な生物が棲息（せいそく）していることが知られています。相模湾の多様な生物相は、地質学的な環境の変化を経て形成された複雑な生物相であることが分かりつつあります。

里山のいきもの

昭和30～40年代以降、生息場所がなくなった両生類、水辺のいきものなどで絶滅危惧種が多くなりました。いきものの一番の天敵は自然界より人間とか。多くの「里山のいきもの」の中で、今も見られるものを掲載しました。

ちょっと昔の葉山のくらし（古民具）

昭和初期まで、仕事やくらしの道具には手作りのものが多く使われていました。ここでは、町に保存された葉山の民具などを写真で紹介しています。

【農業】＝耕作や作物を加工するいろいろな道具が開発されました。

【漁業】＝刺し網漁・見突き漁その他多くの漁法で使った道具です。

【山仕事道具】＝木を切るため、炭や薪を作り、草を刈るためのいろいろな道具です。

【生活用具など】＝長い間に改良を重ねられた道具類です。

小字　小地名マップ

小字・小地名マップ――6地区

葉山町の大字6地区は、江戸時代初期から独立の村でしたが、6ヵ村が統合されて葉山村となった明治22年から「一色」、「堀内」などの旧村が大字としてその名を継続しました。小名とは小地名のことで、土地の形や屋号などそこに住む家を特定するため自然発生したものです。「小名＋名前」によって、所番地はなくとも村中の家の位置が分かりました。木古庭地区では『葉山』の由来についての諸説も紹介しています。

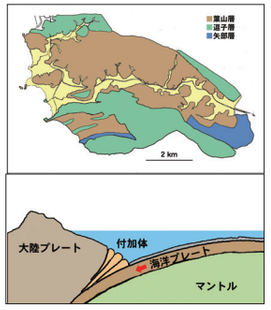
縄文から

原始・古代

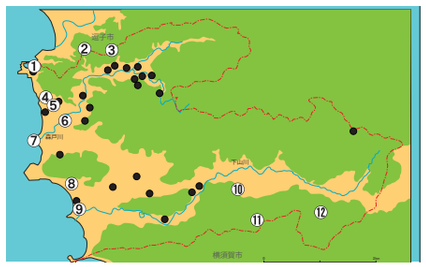
三浦氏台頭まで

葉山町の地質・地形

水源地橋の下にある玄武岩、上山口新沢の安山岩など、葉山層中にみられるこれらの岩塊は、三浦半島がかつて太平洋の中央付近にあったことを示す重要な証拠です。三浦半島の大部分の地層は、海洋プレートが、大陸プレートの下に潜り込めずに、陸側にこすりつけられ形成された付加体であるとされています。現在の葉山町の風光明媚な景観は、深海に堆積した地層が、長い年月をかけて複雑な過程をへて陸上にまで移動したことにより形成された景色です。



遺跡にみる葉山――縄文時代



葉山町内には現在縄文時代（およそ1万年前～）から江戸時代までの遺跡が43ヵ所見つかっています。その数は決して多いとはいえませんが、遺跡はたいてい地中に埋もれているため、まだ知られていない遺跡が存在する可能性は大いにあります。町内では縄文時代の遺跡は5ヵ所が知られていますが、遺跡の立地から、丘陵に所在する高地性の遺跡である馬の背山遺跡、上山口の正吟遺跡や間門遺跡と、沿岸部に近い低地性の遺跡では、森戸神社裏遺跡と長徳寺館址遺跡（木の下遺跡）に大きく分けることができます。

1　縄文時代以前

遺跡にみる葉山――弥生・古墳時代

一色の三ヶ岡遺跡からは、弥生時代中期前葉に位置づけられる、三浦半島でもごく初期の弥生土器が1片見つかっています。葉山町内で最も古いものは、上山口の間門遺跡です。弥生時代の終わりごろから古墳時代の始めごろの竪穴住居跡が12軒見つかっています。三浦半島では3～4世紀代の古墳はないといわれていましたが、平成11年（1999）3月に葉山町と逗子市の境にある丘陵の上（現在の第1号墳）で埴輪が発見されたことを皮切りに、県内でも最大級の大型前方後円墳が2基存在することが分かりました。長柄桜山古墳群です。5、6世紀では、アブズル遺跡や三ヶ岡遺跡、7世紀の一色古墳（御用邸内遺跡）が発見されました。

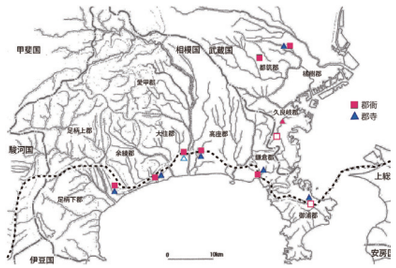
2　弥生・古墳時代

長柄桜山古墳群

葉山町と逗子市の境にある丘陵上で発見された2基の大型前方後円墳とも4世紀後半に築かれたもので、全長90メートル前後の大きさをもち、墳丘もよく保存されていました。その重要性から平成14年（2002）12月19日付で国の史跡に指定されています。

記紀にみるヤマトタケル東征と葉山

『記紀』とは、わが国最古の史書としての『古事記』・『日本書紀』のことをいいます。ヤマトタケルノミコトは、悲劇の皇子として語られる英雄譚の人物です。東征の折、上総国に渡ろうとして、妻のオトタチバナヒメが身代りに入水する走水の挿話はよく知られています。古東海道はヤマトから東国へ行くのに、相模から東京湾を渡り上総から下総へと回るルートで、武蔵国がそれまでの東山道から東海道へ編入される以前の官道のことです。長柄桜山古墳群が築かれた頃、三浦半島を東西に最短距離で横断する「水上交通路」の可能性も考えてみました。



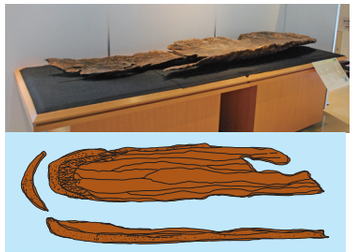
御浦郡（美宇良郡）と葉山

「葉山」の地名は文献資料では南北朝時代の文和2年（1353）6月26日の平某寄進状に「相模国葉山郷」と見えるのが最初です。「御浦郡」の初見は『日本書紀』持統天皇の6年（692）5月辛未（5日）条で、「御浦郡」から「赤烏・アカガラス」が朝廷に差し出されたというものです。『万葉集』には「美宇良佐伎」と読み込まれた歌があります。天平7年（735）閏11月の『相模国封戸租交易帳』という史料には「御浦郡氷蛭郷」が檜前女王、「御浦郡走水郷」は山形女王の食封とあります。食封とは、身分の高い人たちが、与えられた土地と人からあがる税などをその生活費とするものです。かれらはともに、天武天皇の孫世代に相当する王家の人たちですので、その頃の朝廷と三浦地域が直接につながっていたことを示しています。

3　飛鳥〜奈良〜平安時代

遺跡にみる葉山――古代

現在の三浦半島の大半は、律令制成立後は相模国御浦郡の範囲にあり、葉山町域はすべて御浦郡に属したと考えられます。御浦郡内のどこかに郡の役所である郡衙が置かれたはずですが、現在のところどこにあったのかはまだ分かっていません。町内では、奈良・平安時代の遺跡が23ヵ所見つかっています。三ヶ岡遺跡では、9世紀中ごろから10世紀初頭ごろの遺構、遺物が確認されています。御用邸内遺跡でも遺構ははっきりしませんが、古墳時代から平安時代までの土器が発見されています。堀内児童遊園内の防火貯水槽工事中に、クスノキ製の丸木舟の一部が出土しました。



三浦氏台頭期の葉山（平安末期）

三浦氏の出身は桓武天皇の曾孫、平高望の子孫といわれます。「板東八平氏」のひとつで一族は全国各地に広がっていきました。三浦半島にその勢力を広げていった平安末期の三浦氏として為道（通）は、前九年合戦（1051〜62）に手柄を立てたので合戦が終わった後に源頼義からほうびとして三浦郡を与えられ、その後、衣笠城を構えて初めて「三浦平大夫」と号したといいます。三浦氏が半島にその力をのばしていくころ、葉山地域ではどのような人々がいたのでしょうか。葉山地域に関わり深い長江氏は高座郡地域（藤沢市）を中心にその勢力をのばしていた鎌倉権五郎景正、その孫の義景から「長江」氏を名乗っていく系統になります。平安時代の終わり頃には、まだ葉山地域には後の武士団につながるような有力者はいなかったようです。

4　平安時代

三浦半島の中世

治承4年（1180）11月、源頼朝は多くの武士を率いて鎌倉に入り幕府を開きました。次第に北条氏の力が大きくなり、三浦一族の主流など有力武士が倒されていきました。元弘3年（1333）、後醍醐天皇に従った武士たち、特に足利・新田氏により鎌倉幕府は倒されました。しかしその後の時代は、天皇家の分立と足利一門の争いが原因となって南北朝争乱の時代となりました。明応4年（1495）、関東地域を中心に大地震が発生。これを契機に伊豆韮山城にいた伊勢早雲は小田原城を占領、2代氏綱は北条氏と名乗り、その後氏康・氏政・氏直と5代およそ100年その支配を続けました。

5　平安末期〜鎌倉時代

『吾妻鏡』にみる葉山地域

鎌倉幕府が編んだ歴史書『吾妻鏡』には葉山地域のことがよく出てきます。養和元年（1181）6月19日、源頼朝は納涼のため三浦方面にでかけます。その途中の「佐賀岡浜」での出来事。「佐賀岡」は、いまの「三ヶ岡」にあたります。元暦元年（1184）5月19日、頼朝らは「由比浦」から船に乗り「杜戸岸」に着け「杜戸松樹下」で小笠懸が行われました。以後、「佐賀岡」「杜戸」地区では、鎌倉由比ヶ浜と同様に犬追物や流鏑馬・遠笠懸などがしきりに行われ、将軍遊覧の場所であると同時に武芸を披露する恒常的な場所となっていきました。また、将軍頼経は杜戸地域を「七瀬」の一つとして「霊所御祓」をさせました。

6　鎌倉時代

鎌倉・室町時代の長江氏と葉山地域

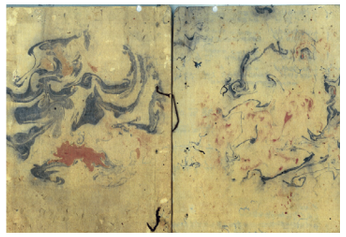
森戸川の中流に長柄の福厳寺、その南側奥の谷には「義景明神」社があり、鎌倉から室町時代の五輪塔が祀られています。地名も字「大山殿ケ谷」といい、領主長江義景の館があったところといわれます。近くには、義景の祖父と伝わる鎌倉権五郎景政を祀る御霊神社や、景政山長運寺があります。義景の子明義と師景と景行に続く実質的な御家人としての系譜は「四郎入道」明義と「八郎入道」師景家の2つになっていきました。その後も続いていく長江一族の足跡を、『吾妻鏡』やその他古文書の中にたどりました。

7　鎌倉時代

8　鎌倉時代

貴重本『小田原衆所領役帳』写本を発見

『小田原衆所領役帳』は、戦国大名後北条氏3代目当主氏康が家臣に命じて作成させたもので、永禄2年（1559）2月12日の奥書があります『役帳』が歴史研究上重要視されるのは、豆州（伊豆国）・相州（相模国）・武州（武蔵国）の村名・貫高（石高）・支配者名が詳細に記入されているからです。徳川家康関東入国以前の資料として、中世戦国期の村を知るための貴重な一次史料です。今回発見された写本「葉山本」から、戦国時代の葉山地区は、葉山郷（堀内・一色）、山口（上山口・下山口）、木古庭、長江（柄）の4区に分かれて支配されていたことがわかります。



9　南北朝～室町時代

木古庭郷の領主闕落と郷村百姓

天正9年（1581）2月、三崎城主の北条氏規は木古庭郷から逃げ出した百姓たちを罰しないので彼らを帰村させてもよい、と地元に残っていた百姓に伝えました。実は、領主宮下自身がこれ以前にどこかに「闕落」してしまい、その後、こんどは多くの百姓らが「郷中明」といって郷村から逃げ出してしまいました。これは重大な違反行為でしたが、残っていた百姓が逃げ出した百姓たちの帰村を北条氏規に要請し、許可されたのです。事件を物語る行方不明だった北条氏規朱印状1通が最近見つかりました。既存の2通と合わせたこれら3通の中世古文書は葉山町の貴重な文化財です。

10　室町時代

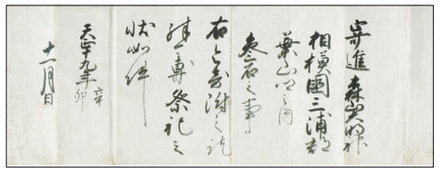
豊臣政権との戦い

天正15年（1587）7月、小田原北条氏は領国内の郷村にいる住民の動員計画を示し、1ヵ月後にその名簿の提出と武具の準備などを命じました。北条政権は「総力戦」の段階に入り始めていたのです。天正18年（1590）3月1日、豊臣秀吉は京都を出発して小田原をめざします。4月初旬には小田原城は豊臣勢力によって包囲されました。石垣山の「一夜城」も築かれ、その間には関東各地の北条方の城は豊臣方により落とされていきました。同年7月5日、小田原の当主北条氏直は秀吉に降伏し、北条氏5代およそ100年の治世はここに終わったのです。その時、秀吉に助命された氏直は高野山に追放されますが、翌天正19年、徳川家康の取りなしで秀吉の家臣として再出発し、ここに北条氏は豊臣大名となりました。

11　安土・桃山時代

江戸時代前夜の葉山（近世の幕開け）

関東に入国した家康は、新しい領国を着々と整備していきました。三浦半島においては、代官頭として長谷川七左衛門長綱を配置し、民政全般に亘って支配させました。同時期に三浦郡の主な寺社に一斉に領地が寄進されています。葉山地区では、森山神社を含め8寺社に朱印状が渡されました。慶長3年（1598）、逗子市沼間の神武寺薬師堂の屋根葺替の棟札奉加帳に貴重な記録があり、短い記録から種々の情報を得ることができました。一色村と堀内村の分離、同じく上山口村と下山口村の分離のほか、長江が長柄と表記されるようになるのも文禄の検地の時以降ではないかと推察されます。



12　安土・桃山時代

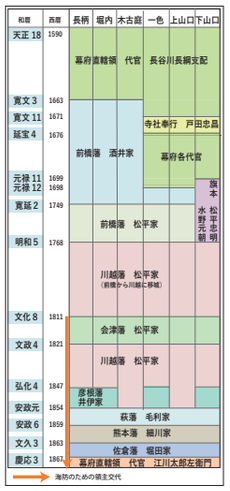
幕藩体制成立から

近世

開国まで

めまぐるしく代わった6ヵ村の支配

北条早雲から5代続いた関東の雄、北条氏は、天正18年（1590）7月、豊臣秀吉の攻撃を受け滅びました。この結果三浦半島は徳川の支配へと移り、三浦半島は直轄領になりましたが、葉山の各村は、江戸半ばには相次いで前橋（川越）藩の支配となります。江戸時代後期は、海防により会津藩、再び川越藩、彦根藩、萩藩、熊本藩、佐倉藩と、三浦半島警備のため交代する各藩の支配下に置かれ、短期間のうちにめまぐるしく領主が代わります。



各村の自治組織―名主変遷と五人組

江戸時代、支配機構の末端の組織は村落でした。村々では、村役人である村方三役（名主・組頭・百姓代）が選ばれ、領主の承認を得て村政を行っていました。「五人組」の構成は、各村で近隣の5～6戸を一組にして組頭を選び、この編成状況を記し、村方三役の署名と捺印をして「五人組帳」を作成し領主へ提出しています。葉山の村方三役（名主・組頭・百姓代）の江戸初期～明治初めまでの変遷を、各資料を調査して、表にしました。

三浦半島の人馬継立――苦しい村民負担

「関ヶ原の戦い」の翌年、徳川家康は宿駅制度を定めました。寛永初期までには五街道（東海・中山・日光・奥州・甲州）が整備され、江戸日本橋からの東海道・中山道に公用人馬が置かれて、宿場ごとに人馬継立（人馬を用意して次の宿場まで運ぶ業務）をするため、沿道の村々が定助郷村となりました。交通が増すにつれ、脇往還（浦賀道・三崎道など）の村々も加助郷、増助郷に制度化されていきました。提供する人馬は「百石に付き何人・何匹」の割合で出します。普通は5人から10人で、それも毎日ではありませんが、幕末になるほど多くなり、ペリー来航翌年には1年で人馬とも急激に負担が増大しています。過度な負担に納得のいかない村々は、雇揚げ（金銭代納）をしたり、差配役の雪ノ下村や戸塚宿に対し、道中奉行に免除願いを出した記録が残っています。

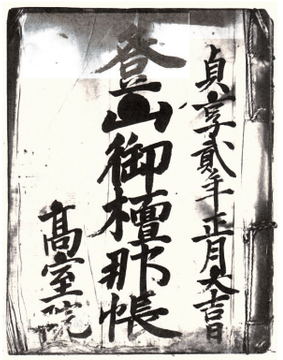
入会地・漁場をめぐる隣村とのいさかい

江戸時代の寛文13年（1673）にも、上山口村と逗子桜山村とが入会地（共有地）の芝の利用をめぐって争いました。桜山大山（現逗子市）の草を上山口村の住民が勝手に苅り込んで使ってしまったからです。地元の言い伝えでは、そこは長柄の持ち分でしたが、山にかかる年貢（税）があまりにもかかるため桜山に譲ったとあります。明治41年（1908）、名島の沖合で逗子小坪村漁師と堀内村漁師が争いをはじめ、双方に多くのけが人が出ました。小坪村漁師37名らは「水目金（水眼鏡）」を使い、葉山名島地先の海産物をそっくり取っていってしまったからです。限られた資源をめぐる争いはたびたび起きましたが、一方で、生活権を確保しながらもそれ以上に自然環境を守っていこうとする先人たちの強い意志を見ることができます。

13 江戸時代初期

「高室院登山帳」にみる葉山

江戸時代を通じて和歌山県高野山から派遣された使僧「高野聖」が各地を廻り高野山詣でを勧めました。葉山からも、多くの人々が伊勢参りや行楽を兼ね、約2ヵ月の日程と高額の費用をかけて、先祖の供養のため高野山へ参詣し、北条氏ゆかりの「小田原坊」と呼ばれた塔頭高室院に宿泊しました。宿泊者の年月日、村名、登山者名、同行者名、戒名などが書かれた宿帳的な「登山御檀那帳、登山帳」には、公的には許されなかった登山者の苗字が記されています。元和8年（1622）から安政5年（1858）にかけての年代別村別登山者数421名の氏名を掲載しました。ご先祖の名前を探してみてください。



江戸時代の年貢――元禄検地前後の村高

検地とは、田・畑・屋敷の面積と収穫量の調査で、台帳は「検地水帳」または「水帳」と表記されており現在の課税台帳に当たります。葉山町所蔵の一番古いものは、木古庭村の文禄3年（1594）の「検地水帳」（「御なわうち帳」と表記）です。元禄12年（1699）に実施された検地では、5ヵ村の「検地水帳」原本、写本が残っています。この検地帳による村高、および田、畑・屋敷を含む面積を表で示しました。飢饉や旱魃などの天災や川欠引等で年貢の軽減措置がとられています。また、支配層の消費増で、田畑以外の課税項目を増やし、増収を図った領主側の対応が読み取れます。

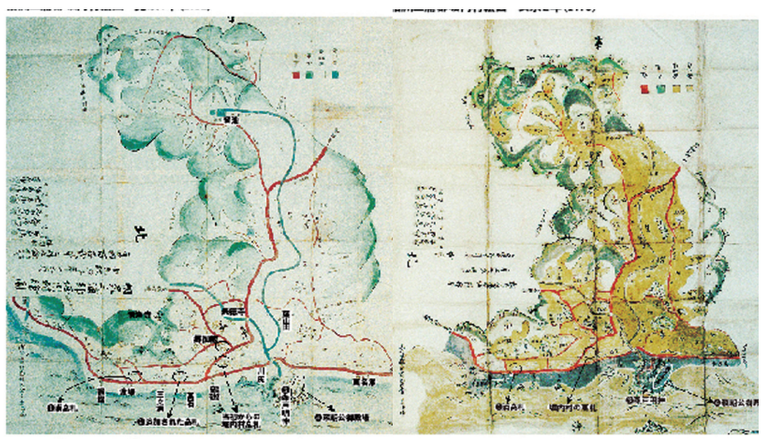
14 江戸時代

江戸時代の相模国絵図にみる三浦半島

宝暦2年（1752）の「日本輿地図」、天保9年（1838）「相模国絵図」の三浦半島で、当時の葉山の様子が分かります。

江戸時代中期の堀内葉山家絵図

安永2年（1773、寛政4年（1792）の堀内の絵図。高札の位置や、今は消えた浜道が主道路だったことが分かります。



自然災害による浜道消失・三崎道迂回など

享保5年（1720）に浦賀奉行所が開設され、翌年、堀内村浜道に「浦高札」を立てて「浦賀道」の通行が賑わいます。葉山家絵図、文化3年（1806）完成の『浦賀道見取絵図』にも浜道に、もう一つの高札が立っています。しかし幕末まであった浜道は、明治の地図にはなくなっています。葉山の災害の少ない記録から、浜道消失の謎に迫りました。また、最近までの葉山関連災害をリストにしています。強風でヨットハーバーに係留されたヨットに、しばしば被害が見られるのも葉山の特徴です。

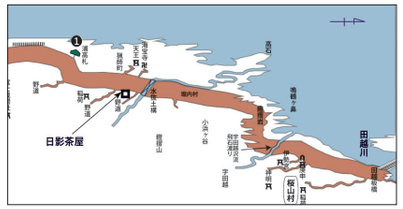
葉山に影響した自然災害
（地震・台風・噴火など）M＝マグニチュード

元慶2	878 11/1	相模・武蔵　圧死多数	M7.4
永長元	1096 12/17	東海沖の巨大地震	M8.0~8.5
嘉保元～正嘉元	1213 ~1257	鎌倉で地裂け、山崩れ、津波などの記録(吾妻鏡)	M＝7.0~7.5
永仁元	1293 5/27	鎌倉強震、建長寺炎上 死者数千～27万3千余	M＝7.0
明応7	1498 9/20	東海道全般　全壊で溺死4万人以上	M8.2~8.4
元禄10	1697 11/25	鎌倉の鶴岡八幡宮の鳥居倒れる	M＝6.5
元禄16	1703 12/31	元禄地震(江戸・関東) 死者数千	M＝7.9~8.2
宝永4	1707 10/28	「宝永地震」(五畿・七道) 死者全域で2万	M8.6
宝永4	1707	富士山大噴火 火山灰降灰(神奈川県西部は5日)	
享保6	1721	浦賀奉行所が現在地に置かれた	
宝暦5	1755	日本橋地震❶	
明和9	1772	品川の遊郭5番ねた床中現出	
安永5	1777	安房・相模・伊豆で高潮、民家破損多数	
天明2	1782	小田原地震	M＝7.0
天明3	1783	浅間山噴火で関東降灰被害大	死者1151
文化9	1812 12/7	武蔵・相模などで震度6で死者あり	M6.75
文化13	1816	芝崎用屋敷で三崎街道ルート変更	
安政元	1854 12/23	「安政東海地震」(死者2~3千人、所可津・焼失13戸	M8.4
安政2	1855 11/11	「江戸地震」(死者4千人、倒壊数・焼失3万4千軒	M7.0~7.1
安政3	1856 9/23	「東京(江戸)湾直風」・高潮　死者165余 鎌倉七里ケ浜の漁家全滅 葉山町内・逗子の山王社流され、山側へ移設 葉山下山口・万福寺大災で焼失	
明治8	1875	矢部家の屋内切切❷	
大正6	1917	台風高潮で浜辺の多くの漁家流される	
大正12	1923 9/1	「関東地震」(死者不明10万5千余、住家全潰10万9千余、半壊21万千余、焼失31万7千余　M7.9	
大正13	1924 7/15	「丹沢地震」(死者14、倒壊家屋1200余	M7.3
昭和34	1959 9/26	「伊勢湾台風」(死者4,697 長柄鎮座ゼロヤナギの大木倒れる	
昭和54	1979 10/19	台風20号（葉山の死者1、住家一部破損1360、船舶被害24、通信被害291	
昭和60	1985 7/1	台風6号（葉山の住家一部破損102	
昭和61	1986	伊豆大島大山噴火　全島民島外避難	
平成16	2004 10/9	台風23号（葉山の住家一部破損34、その他105	
平成21	2009 10/8	台風18号（葉山の住家一部破損25、船舶被害30	
平成23	2011 9/21	台風15号（葉山の死者1、住家一部破損48	

出典：国立天文台編「理科年表」(2013)、「葉山町消防署被害状況報告書」ほか

葉山を通る「浦賀道」と高札

浦賀奉行所の置かれた浦賀に至る「浦賀道」には、2通りのルートがありました。1つは、東海道の保土ヶ谷から金沢、大津をへて浦賀に至る、半島の東海岸に沿って下る道、もう1本の「浦賀道」は、文化3年（1806）完成の『浦賀道見取絵図』に描かれています。戸塚から三浦半島を横断するルートで、鎌倉雪ノ下、逗子の小坪、葉山の堀内、一色、上山口、木古庭から横須賀の平作、衣笠を経由し、大津で保土ヶ谷からのルートと合流します。高札や庚申塔、寺社が描かれたこの「絵図」は、記録の少ない当時の葉山の村々の貴重な地誌となっています。鎧摺から木古庭までの「浦賀道」に現在の情報を載せました。



堀内村の岡濱（おかはま）騒動と三ヶ浦村

堀内村のように、海附の村（海に面している村）は、村内に農産物を生産する岡方と漁業に従事する濱方から構成されています。堀内村の濱方は岡方と較べ家数・人数が圧倒的に多いにもかかわらず、岡方に牛耳られていることに、日頃から不満がありました。下田から浦賀に奉行所が移った翌年の享保6年（1721）、岡方では奉行所の業務に十分な対応が出来なかったため、濱方を三ヶ浦と唱え、家数を分けた上、濱方三役を立てて、浦賀奉行所の御用弁のみを務めさせました。これを機に、濱方は三ヶ浦村として堀内村からの独立の気運が高まり、岡濱出入りが数度に及びました。しかし、結果として、濱方が念願した岡方からの独立は出来ませんでした。

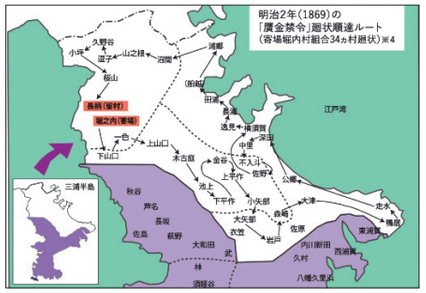
さまざまな講と石塔

講は、本来信仰を持つ人々による集まりのことですが、「無尽講」のようなものもあり、「講」という名称で呼ばれる対象は多岐に亘（わた）っています。ここでは「富士講」など信仰によるものを中心に、葉山にあった講、また現在も続いている講について一部を紹介します。葉山には、仙元山や長柄の石碑、古文書などに富士講の遺物が残っています。

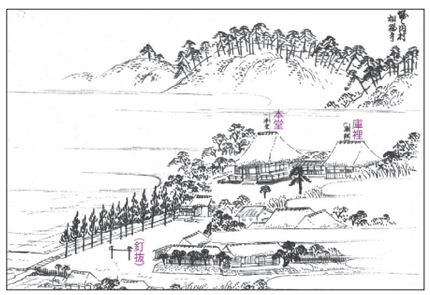
庚申（こうしん）とは、十干（かん）と十二支（し）を組み合わせた60通りの干支（えと）の一つの庚申「かのえさる」のことで、中国道教の「三尸（さんし）説」をもとに、密教・民間信仰などが絡み合った複合信仰で、江戸時代に庶民に広がった講です。庚申塔は葉山の各地域に見られ、旧街道の要所に集中して建立されています。聖徳太子を職能神として信仰する職人たちの太子講碑もみられます。

三浦半島北部のまとめ役だった「堀内村」

天明年間（1781～88）の大飢饉をきっかけとして農村の荒廃が起こり、無宿・悪党と呼ばれる層の発生が領主支配体制を脅かす存在となってきました。このような情勢に対し、徳川幕府は「関東取締出役」という警察組織を設置しました。一方これに呼応するかたちで農村地域にも文政10年（1827）、「寄場（よせば）組合」と呼ぶ自治組織を作らせました。三浦半島北部34ヵ村の「寄場組合」では、浦賀道・三崎道の分岐点に位置した堀内村が「寄場」となり、以後明治初期に至るまで、諸村のまとめ役として種々の役割を担います。

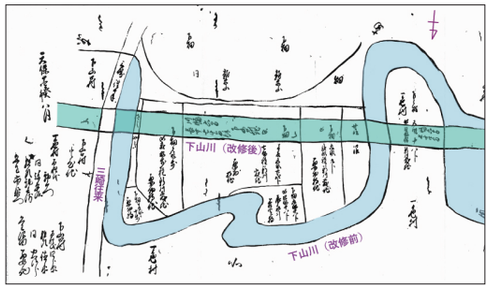


『相中留恩記署（そうちゅうりゅうおんきりゃく）』にみる天保頃の葉山名所



『相中留恩記署』は、相模国鎌倉郡渡内村（現藤沢市）の名主福原高峯が、絵師長谷川雪堤の協力により、徳川家康に関する相模国の事跡を巡って編集し、天保10年頃完成した図会形式の地誌と伝わっています。葉山部分では、ここに集めた5寺、3社、1眺望図のほかに、各寺社の朱印状写しが掲載されており、天正19年（1591）に家康より御朱印を賜った寺社を巡っています。それらは当時の名所旧跡にあたる場所だったと思われ、山号や開基、祭神などとともに寄進された領地の石高が記されています。

江戸時代後期の葉山の河川工事



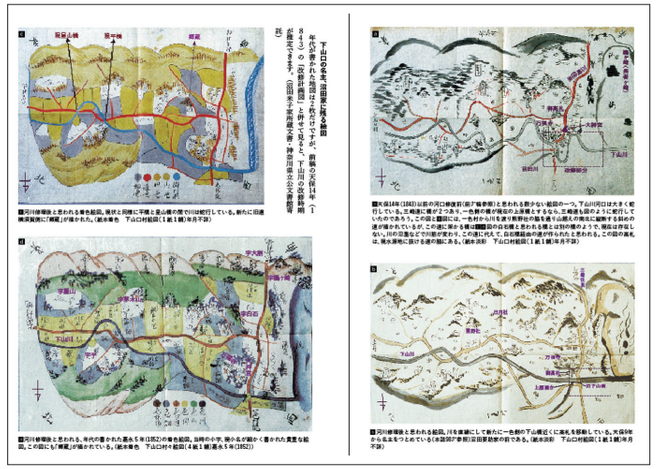
下山口村、堀内村の名主宅に、江戸時代の河川の改修計画絵図、河川護岸被害状況絵図が保管されていました。

御用邸前の国道１３４号線周辺から、河口にかけ蛇行する村境の川を直線にする工事の下山川の川筋改修計画絵図には、下山口村と一色村の村役人名があることから、両村の合意書を兼ねたものと考えられます。

森戸川の護岸被害状況絵図は、天保12年（１８４１）９月に当地を支配した川越藩の「御普請方御役所」へ、堀内村から提出した絵図です。

沼田家絵図にみる下山口村

天保14年（１８４３）の河口が大きく蛇行している下山川修復前と思われる絵図、直線となった年月不詳の２枚と、嘉永５年（１８５２）の修復後の絵図で、移動した高札や、郷蔵の位置、今に残る字名など情報満載の絵図。



江戸時代と明治期の葉山の農水産物

江戸時代から明治にかけ、どのような作物を栽培し、また海から何を得ていたのでしょうか。江戸時代の当地の農水産物を記録した史料は少なく、主に年貢関連史料に書かれた産物や、領主へ提出した史料から拾い出しました。葉山の農産物は、穀類と、大豆、菜種、大根、木綿、いもなどです。また、江戸時代末から明治にかけて葉山周辺は、絞油業も盛んだったようです。明治初期の長柄村では、ショウガが多量に生産されていました。海産物では、明治初期の三ヶ浦を控えた堀内村では、磯場、近くの沖でとる手操漁の魚の類いが多く、多種類の魚類・エビ類・貝類がとれ、カジメ、ワカメ、海苔など海藻類の収穫も大量でした。

表4　長柄村の野菜・果実・他
「明治９年物産表」より作成

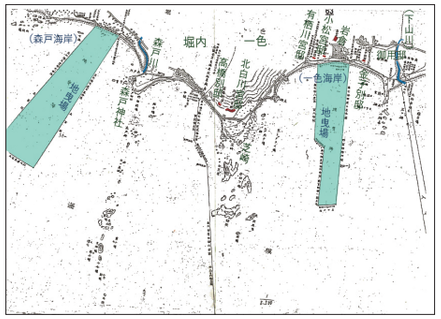
野菜類	数・量目	山菜・他	数・量目	穀子・果実	数・量目
キュウリ	11荷	竹の子	140束	柿	32貫
白瓜	25荷	ウド	3荷	胡桃	5斗
ナス	100荷	ワラビ	3荷	栗	25石
ツルインゲン	4荷	百合	7束	茶	1石
エンドウ豆	5荷	セリ	2荷	柿	12束
ヤツマイモ	3000	山の葉	70束	クメ	1石
青イモ	80荷			ビワ	60束
蕗薯(大根)	100駄			ナシ	240束
ラッキョ	16			蜜柑	26束
ネギ	50			梨	12束
冬ネギ	8			アンズ	7束
ゴボウ	7				
ショウガ	4320束				
菜	30荷				
野菜冬	12荷				
蕗薯	5荷				
コンニャク玉	30束				

1石＝10.6＝180L　1束＝3.75kg
※数・量目に単位がないものは原文書になし

江戸時代から明治期の漁業

江戸時代、葉山の漁業はどんなものだったのか、堀内に伝わる年貢関係の古文書から垣間見ることができます。

江戸時代初期には「船役銭」の１項目だった年貢が、幕末には、そのほかにも「濱役銭」・「鮑運上」・「肴仲買運上」・「船方冥加永」・「鰍網冥加永」・「藻草冥加永」と増えています。この間にそれだけ漁業が盛んになったこともあったでしょう。漁獲物は地元で消費されるほか、カツオやタイなどは一大消費地となった「江戸」へも出荷されるようになっており、輸送体制の確立が理由のひとつだと思われます。

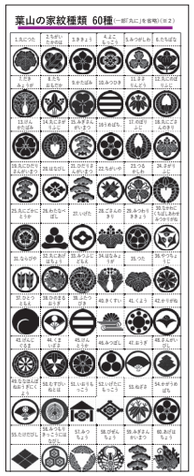


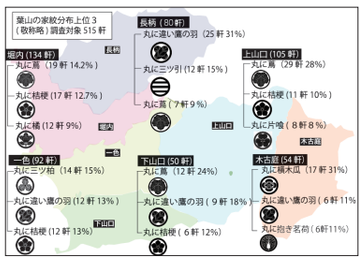
村々の生業と農間商い渡世

明治初期の石高から見る６ヵ村は、全国的には中規模の村々でした。ここでは各村別にそれぞれの特徴を見てみました。もともと半農半漁の一色村には、明治27年に御用邸が造営され、行政機関が集中し、一躍葉山の中心となりました。漁業と商業で賑わった堀内村は、他の村々とくらべ商いをする人が多く、一方、漁業に従事する家が64パーセントで専業漁師がほとんどでした。戸数の割には寺が多く林業も盛んな長柄村は、豊かな村でした。江戸時代を通じて名主を務めた木古庭伊東家は葉山村初代村長、初代町長に就任し明治の葉山地区に大きな功績を残しました。上山口村は６ヵ村中、面積も石高も最大で、絞油業も豊かさを支えました。三崎道沿いの商店で賑わう下山口村は、半農半漁の村で、堀内村についで商業活動が活発でした。

葉山の家紋

江戸時代、一般町民は名字（苗字）を公称できませんでしたが、家紋は「菊・葵紋」以外は自由に使用できたようですので、次第に増えていきました。文久２年（１８６２）から明治５年（１８７２）までの５１５軒を対象に、古文書や、墓石、聞き取りから調査しています。「丸に蔦」、「丸に違い鷹の羽」、「丸に桔梗」が葉山全体で多く使われている３点の家紋です。葉山の家紋60種とその分布を図と地図で表しました。



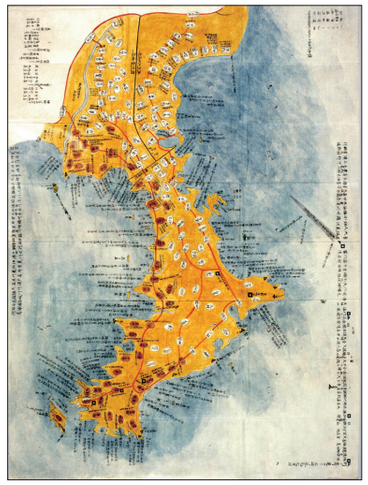


葉山の屋号

屋号は「いえな」、「かどな」、「こな」、「あざな」などといわれ、それぞれの屋敷につけられた呼び名です。同じ苗字（名字）の多い村では、日常の生活においてお互いの住居を呼び分けるのに必要とされました。祖先が伝え残したものとして味わい深く、村の成り立ち過程や古い生活様式を推しはかる資料です。屋号には、地域によって特色がみられ、分類の仕方もいろいろありますが、葉山6地区の文久2年（1862）から明治9年（1876）頃までの屋号について、主なものを、謂（い）われ（由来）を含めて町内別に記しました。ここでは、先祖名による屋号、職業からの屋号、家系からの屋号、地勢（地形）、小名からの屋号に分類してあります。家紋とともに、だんだん消えていく屋号ですが、江戸時代から続いてきた生活や職業、地勢などを振り返るのに、大変貴重な資料となりました。

幕末三浦半島の海防体制と葉山

およそ200年続く鎖国政策を開国へと大きく時代を転換させたのは、嘉永6年（1853）6月、アメリカのペリーの率いる4隻（せき）の黒船の浦賀来航でした。幕府は文政8年（1825）に「異国船打ち払い令」を布告し、外国船の接近に備え、台場を建設し、陣屋や連絡組織を整備し三浦半島の警備体制を強化します。そのため大政奉還までの20年間に、5度の警備支配交代がありました。幕末に警備を担当した各藩の体制や、葉山の動向を詳しく調査しました。



明治維新から

近代

終戦まで

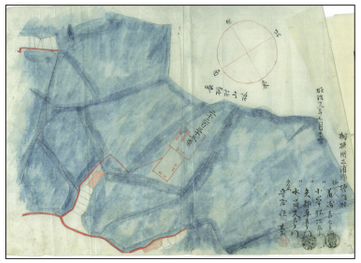
明治維新とあらたな葉山（新地方行政）

慶応4年（1868）4月、江戸城は無血開城、7月には江戸は東京へと呼び方も変わりました。9月には明治と改元、明治新政府が誕生しました。新政府はあらたな政治をすすめていくための改革を矢継ぎ早に行います。江戸から明治へという社会変革を葉山の住人たちはどう受け止めようとしていたのでしょう。ここでは、木古庭村名主伊東家の動きからかいま見てみましょう。江戸時代の制度が残る地方の姿を政府は改め、一刻も早く近代化を進めたいと考えていたこと、それに応える地域の有識者たちの姿がここにはありました。

17 明治時代

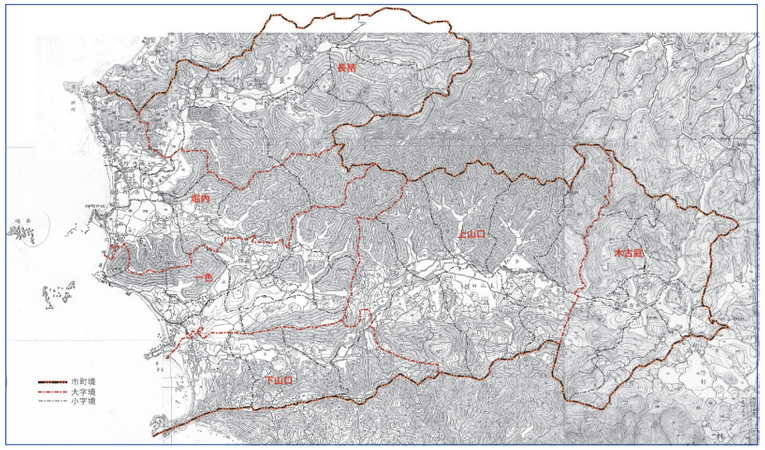
コレラの大流行と葉山

日本でコレラのはじめての発生は、文政5年（1822）長崎でのことでした。明治12年の被害は甚大で、死者数は10万5800人余り、死亡率は60～70パーセントと伝えられています。葉山も例外ではありませんでした。明治10年頃に流行したらしく、下山口に残る古文書は死者を荼毘（だび）に付した火葬場から出た灰埃（はいぼこり）が農作物の粟（あわ）に降りかかった不安を伝えています。やがて伝染病で死亡した人々の火葬場が、別に設置されることになりました。人家から離れていることを最優先しています。明治30年、葉山村長柄に、伝染病隔離病棟を3棟建設、環境を整備し、公衆衛生思想を普及していきました。



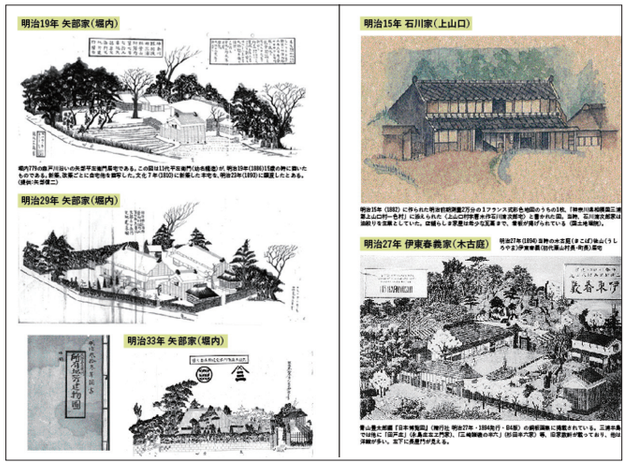
明治15年の6ヵ村地図と堀内村切図（きりず）

明治新政府の陸軍参謀局による「2万分の1フランス式彩色地図」はのちの地形図のもととなります。ここでは6枚を統合しています。



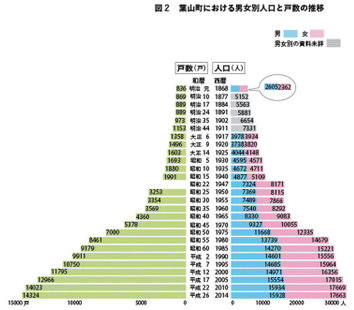
明治期の葉山の住宅

明治初期の住宅はどんなものだったでしょう。上山口の油絞りを生業としていた瓦葺き二階建ての石川家、『日本博覧図』という銅板画集に掲載された木古庭の伊東村長宅、当主が新築、改築のたび描いた堀内の矢部家を掲載しました。



江戸時代以降の人口のうつりかわり

木古庭村。上山口村、長柄村の人口・戸数は、江戸中期以降ほとんど変わりません。海岸を有する堀内村、一色村、下山口村は農村と漁村を兼ねており、3ヵ村は街道筋にある裕福な村として、江戸末期には戸数も人口も増加しています。明治元年（1868）、葉山の総人口は5000人を割っていて、しかも堀内村と一色村の2地区だけで55パーセントを占めていました。昭和50年には、複数の大規模団地の完成等により、戸数7000戸・総人口2万人を超え、平成に入ると、ほどなく戸数1万戸に。現在の総人口は3万3000人を超えています。



寺子屋から続く葉山の学校

葉山各地の寺子屋から堀内郷学校を経て、明治6年、堀内学校と山口学校が開校しました。明治24年には、第一から第四までの尋常葉山小学校が開校、大正14年の町制施行を受けて、15年には葉山尋常高等小学校一校に統合されます（上山口は分教場）。昭和16年には国民学校と改称、昭和22年、ようやく町立葉山小学校と名を改めます。同時に新制葉山中学校も設立しました。その後人口の拡大にともない、長柄小学校、南郷中学校、一色小学校が次々に開校、現在葉山には、2つの中学校と4つの小学校があります。戦後の私立小学校についても触れています。学校統廃合の歴史を、表にしました。

18　明治時代

明治になると別荘時代が到来（別荘1）

葉山には、明治20年前後に皇室侍医のベルツ博士やマルチーノ駐日イタリア公使が来遊し滞在、保養地として最適であると推奨したため別荘が建ちはじめ、明治21年（1888）池田徳潤（のりまさ）男爵が堀内に最初の別荘を建築しました。明治22年横須賀線逗子駅が開設され、明治27年（1894）御用邸が造営されると、治安も保たれた高級別荘地として、宮家、華族をはじめ政官界の要人、陸海軍の将官、学者、実業家、芸術家らが続々と別荘を建てていきました。大正2年までに別荘を建てた主な人物を表で示しました。

起業家鈴木三郎助

明治21年（1888）の秋、堀内の初代鈴木三郎助忠七の妻ナカは、嫁テルとともに「ヨード」造りに成功します。「ヨードチンキ」「ヨードホルム」などで知られる消毒薬の原料となるものでした。その技術は後に世界に知られる「味の素」の下地になったのです。「ヨード」作製の基本は大量の海藻を焼き「灰ケルプ」を取り、さらに硝酸と硝石を混ぜて高温処理をします。捨てていた「灰ケルプ」ですが、後にその成分から「塩化カリ」を取り出す技術にも「鈴木製薬所」は成功します。これによって大量の「硝酸カリ」（硝石）が製造されるようになりました。それは火薬の原料でした。葉山堀内にあった「日本沃硝製造所」は日本でただ一つ「ヨード」と「硝酸カリ」を造り出す製薬所として、明治38年（1905）の万国博覧会で金賞を獲得しました。

19　明治時代

葉山御用邸の造営

葉山一色の御用邸は明治26年竣工、翌27年には完成しました。すでに完成していた有栖川宮別邸を利用し、病気療養していた孝明天皇皇后（英照皇太后）や大正天皇（皇太子）への保養先が必要とされ、建設されたのが葉山御用邸です。皇室の保養地として葉山が選ばれた理由の一つには、レナート・デ・マルチーノ元イタリア駐日大使やエルウイン・フォン・ベルツ元東京帝国大学医学部教授などによる別荘地葉山の紹介があげられます。なかでもベルツは、皇室侍医としての実績から皇室の保養先として葉山を推薦し、葉山御用邸の建設に一役買うことになりました。御用邸の造営は、明治天皇の造営費「勅裁」を得て落成し、以来「葉山御用邸」と公称されました。

葉山の交通発展の歴史

「葉山の交通」はどのような変遷を遂げたのでしょうか。「江戸時代の陸路交通」⇩浦賀、三崎の両奉行所へ至る官道の分岐点であった堀内村は、三浦半島の「要所」として重要な位置を占めていました。「海路交通」⇩「海運」としては、浦賀の「廻船問屋」と堀内の海岸を結ぶ航路が確立され、多くの生活物資が海路を経て葉山へもたらされました。「明治・大正時代」⇩軍港として栄えた横須賀へは鉄道「横須賀線」が開通し、やがて馬車やバス等の自動車が庶民の足としても使われるようになります。実現にはいたらなかったものの、葉山には京浜急行電鉄の路線が計画されたこともあったのです

20　明治時代

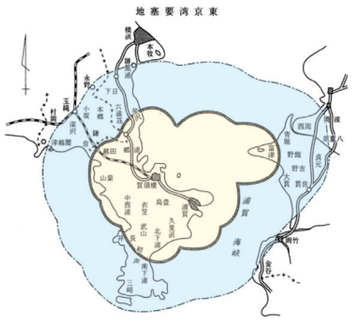
横須賀海軍工廠に通った葉山の人々

江戸幕府が構想し設立した横須賀製鉄所とは、艦船の製造、修復、そのために必要な材料機械工具の製造を行う大規模な工場です。元治2年（1865・4月慶応と改元）1月にフランス公使ロッシュの推薦で海軍造船技師ヴェルニーが来日しました。慶応3年（1867）10月、15代将軍徳川慶喜は大政を奉還し、江戸幕府は倒れ、新政府が樹立されます。明治新政府は製鉄所の事業を受け継ぎ、工事半ばのドックは明治4年（1871）2月に完成、同年4月、横須賀造船所と改称し、翌年10月、同じく改称した横浜製作所と共に海軍省の管轄となりました。明治36年11月には、組織、技術の拡充発展を経て、横須賀造船所は横須賀海軍工廠として発足します。日本最大の規模を持った海軍工廠へは、葉山からも多くの人々が就職したということです。

21 明治時代

要塞地帯法と葉山のくらし

じつは太平洋戦争の敗戦まで、三浦半島と対岸の房総半島西部一帯を写した写真や絵画、地図などの印刷物は、すべて軍の許可がないと発行できませんでした。明治32年（1899）7月14日、同時に2つの法律が公布されました。ひとつは「軍機保護法」、大規模な軍事施設の近くの住民たちを強く縛ったのが、もう一つの法律、「要塞地帯法」でした。この法律により、海軍工廠や鎮守府など重要な軍事施設が集中している三浦半島は、いたる所で憲兵が目を光らせるようになります。当時の葉山村は、日常の様々な部分に、要塞司令官の許可を要する要塞地帯の一部でした。



日英同盟に向けた一色での「葉山会議」

当時の日本は欧米列強が東アジアにおいて展開していた植民地主義による侵略から国を守るために、欧米の近代的なシステムを導入しながら国力の増強を図る一方で、自らも「富国強兵」策による対外膨張の道を目指していました。そんな折、時の首相桂太郎の別荘（長雲閣）に元老山形有朋・西郷従道・松方正義・井上馨・大山巌と桂首相、小村寿太郎外相、山本権兵衛海相の8人が集まり「日英同盟協約」を結ぶ重要方針を決定した会議が行われました。明治34年（1901）12月8日の一色の「葉山会議」です。

22 明治時代

御用邸造営頃からの道路網整備

明治35年頃、陸軍大将桂太郎は、一色上原から平松に通じる桂道を開きます。昭和6年（1931）、天皇即位御大典記念事業として逗子駅から御用邸までの行幸道路が完成しました。昭和35年（1960）頃、国道134号の大道交差点から横須賀方面へ向かう県道野比葉山線が完成、上山口、木古庭方面からの通行が改善されました。昭和42年（1967）、長柄から逗子海岸に抜ける長柄隧道開通。昭和45年（1970）から横浜横須賀道路と有料の逗葉新道が整備され、昭和57年には逗子インターチェンジが供用開始。平成3年（1991）、葉山隧道の拡幅工事完成、三浦半島中央道路は、平成16年（2004）に開通、平成22年（2010）9月、新桜山隧道が完成しました。

葉山港「日本ヨット発祥の地」の石碑

慶應義塾の水泳部は明治35年（1902）に葉山村堀内の相福寺で合宿を始めました。プールのない時代、森戸の海が水泳部の訓練の場でした。水泳部が伴走用の備品として作らせた勝郎型ヨット（ラーク型いわゆる下駄ヨット）を、森戸沖で帆走させたのが明治45年（1912）で、これが日本の近代ヨットの草分けとなったといわれており、葉山港入り口の「日本ヨット発祥の地」というセール型石碑の所以となっています一方、知多半島では、のち造船の第一人者になる小野暢三が明治34年（1901）に帆走したことが記録されています。慶應ヨット部がオリンピックを目指すレース志向型の元祖としたら、彼は風を楽しむブルーウォーター派の魁でした。

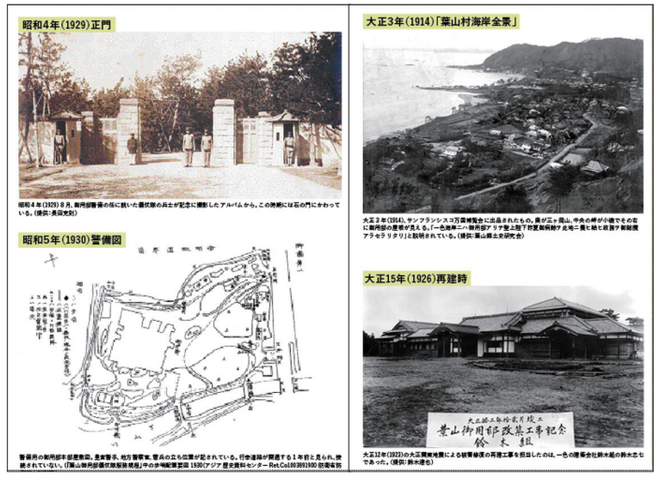
新たに発見された古文書

葉山では今までに約4500点の古文書が発見されています。古文書は歴史上史実の証明力が大きいため、第一次資料として重視されるものです。江戸時代後期、川越藩などの領地であったため、これらの代官からの年貢割付状や代官役所への願い文等、多くの「地方文書」が残っています。一方民間には、田畑を質にした借金証文、農漁民の争い文書などがあります。「横帳（大福帳）」・「綴（新紙幣発行通達）」・「状（年貢割付状）」などを紹介しています。

「横帳」

写真に見る御用邸の歴史　その2

大正3年（1914）の御用邸を含む一色の写真、大正15年、関東地震で倒壊した御用邸本邸の再建時の写真、昭和4年、御用邸警備兵士が残したアルバムの写真、昭和5年の歩哨の位置などを記した警備図を掲載しています。



葉山御用邸水源地施設の完成

23　明治・大正時代

かつてここから湧き出す清水は近所の人々の生活用水に利用されていましたが、大正2年（1913）に宮内省に買い上げられ、翌年から御用邸の水源として使用されました。その名残として道路脇にはいつも清水が放出され、その背後の金網の奥に大きなコンクリート製の貯水槽が残されているのが見られます。この水槽のある場所から御用邸までの鉄管の総延長は約3キロほどですが、白石橋・しゅめりょう橋近くなど、下山川を縫うようにわたり、御用邸へとつながっている姿を見ることができます。

日蔭茶屋事件――文学にみる歴史

大正5年（1916）11月、日蔭茶屋は、アナーキスト大杉栄と伊藤野枝との仲を嫉妬した神近市子が大杉を刺した傷害事件の舞台となったことで有名になりました。31歳の大杉栄は、婦人解放雑誌『青鞜』の編集者で新しい愛人の野枝と一緒に日蔭茶屋にやってきます。翌日、市子が現れ鉢合わせ、運命の3人で宿泊となり、翌朝、野枝は帰京しました。市子はその夜、夜中に起き出して大杉の喉を刺しました。7年後の関東大地震直後、大杉と5人目の子を出産したばかりの野枝と、彼らの甥で6歳の橘宗一は、地震の混乱に乗じて東京の憲兵隊司令部で暴行の上虐殺され、甘粕事件と呼ばれました。

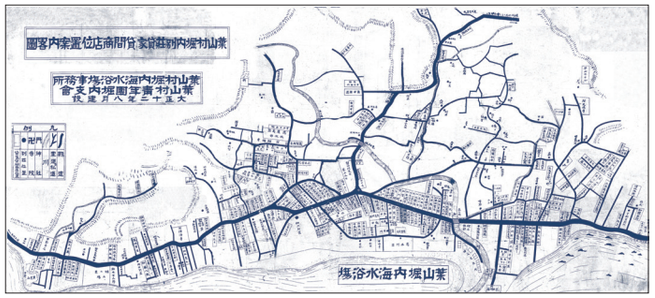
葉山御用邸附属邸と南邸

24　大正時代

「葉山しおさい公園」は元「葉山御用邸附属邸」の跡地で、「大正天皇崩御・昭和天皇皇位継承の地」の町指定史跡です。大正天皇の最後の行幸先が附属邸となったのは、本邸が関東大震災の被害の修復のため再建中だからでした。附属邸の践祚の儀式が行われた「践祚の間」は、御用邸本邸に移築され、現在もそのままの形で残っています。御用邸関連施設としてはこの附属邸のほか、本邸を挟んで下山川の南側に「葉山南御用邸」もありました。明治末には、現県立葉山公園のところに、馬場が造営され、大正5年（1916）には、近くの下山口に馬の飼育と調教を目的とした主馬寮ができました。

大正関東地震直前の堀内海岸地区の詳細地図

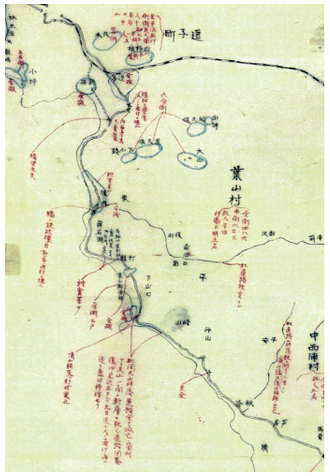
大正関東地震直前の「葉山村堀内別荘貸家貸間商店位置案内略図」で、葉山村青年団堀内支会が「葉山村堀内海水浴場事務所」を8月に開設した記念に制作されたものです。商店や、多くの別荘などが記されており、賑わう海水浴客への対応に張り切る青年団の様子が目に見えるようです。現物は大きな青図ですが、反転して見やすくしました。当時は現在の森戸海水浴場を「堀内海水浴場」と呼んでいたことが分かります。



大正関東地震（関東大震災）時の葉山

25　昭和時代

大正12年（1923）9月1日、11時58分32秒。神奈川県西部から相模湾を経て、房総半島の先端に達する震源域で巨大な地震が発生しました。これが大正関東地震です。この地震により、葉山町にはどのような被害が発生したのでしょうか。震災直後に作成された「震災地応急測図原図」から葉山町の被害をひもといてみました。葉山に残る記録と、強烈な体験をした各地区の方々の聞き書きから、当時の様子を再現しています。



葉山村から葉山町へ（町制施行）

明治22年（1889）、市町村制施行により、三浦郡葉山村（6ヵ村の合併）が新設されました。36年後の大正14年（1925）1月1日、町制の施行により、三浦郡葉山町となりました。葉山村から葉山町への移行は大地震の後、間もなくなされたもので、いわば財政的にも厳しい船出でした。当時の予算からは、難しい局面を乗り越えた町政の姿を読み取ることができます。葉山町誕生時の、村民・町民力を合わせての復興努力の過程は、他市町村同様、90年後の今日にも、一つの道標となって残っていると言えましょう。

26 昭和時代

昭和は葉山から—昭和天皇附属邸で践祚（せんそ）

大正天皇はご幼少のころからお病気がちでしたが、大正14年（1925）夏、侍医たちが葉山での療養を強く願い、8月10日、お召列車で葉山附属邸である「澄宮御殿」に到着されました。大正15年12月16日にはご容体が「ご険悪」との緊急報が東京に打電され、在京の皇族方は急ぎ臨時列車で葉山に向われました。この時の様子を、読売新聞は「東京の縮図のような葉山」と紹介しています。25日、大正天皇が崩御されますと直ちに皇太子殿下の裕仁親王殿下が践祚の式に臨まれ、第124代天皇になられました。践祚の儀が終わると、御用邸内では政府の臨時閣議や枢密院の会議が開かれ、新しい年号が「昭和」と決まり、昭和が葉山で誕生することになりました。

27 昭和時代

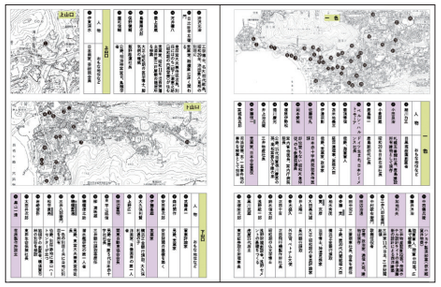
昭和天皇ご採集の海洋生物

葉山しおさい博物館に展示されている昭和天皇御採集による御下賜（ごかし）標本は、昭和天皇のご研究を知る上で欠かすことのできない資料であるとともに、戦前から戦後にかけて、ほとんど残されていない相模湾の生物標本としても貴重な資料です。昭和天皇ご自身はヒドロ虫類の分類学的な研究をなされ、相模湾から採集されたヒドロ虫類の資料をもとに9編の論文を著されました。また、昭和天皇のご採集標本をもとにウミウシ類をはじめとした研究が行われ，相模湾が世界的にも珍しい多種多様な生物が多く棲息している海域として広く学会に知られるきっかけとなりました。

28 昭和時代

新富裕層による別荘ブーム（別荘2）

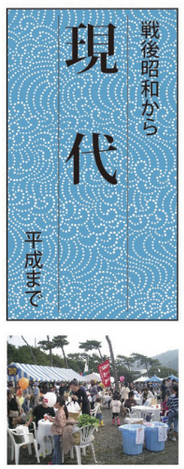
大正に入ってから、第一次世界大戦（大正3年～7年）とその後の好景気、反動で起こった大恐慌や大陸進出という政治、経済、軍事が複雑に絡（から）み合うこの時期、財閥や資産家は社会的地位の向上を示す別荘を所有するようになり、その地を葉山に求めました。湘南電車が逗子に乗り入れ、海岸道路には乗り合いバスが通り交通の便がよくなると、新富裕層も加わって、昭和9年（1934）には487棟もの別荘を数えるまでになり別荘数はピークになりました。大正末期から昭和前期に別荘を構えたおもな人物を表にまとめました。



第二次世界大戦と葉山

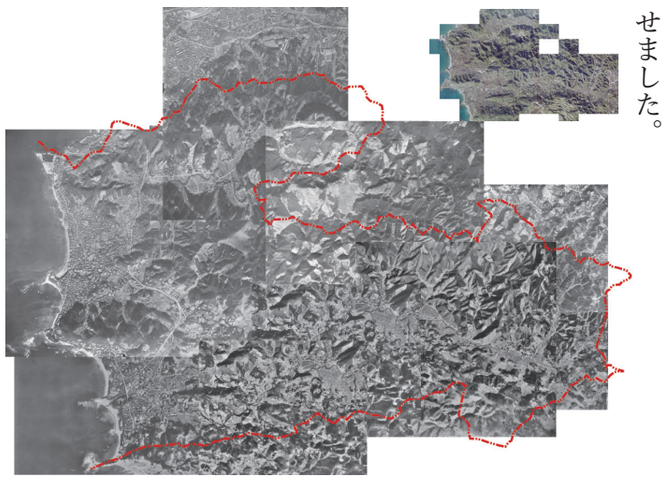
昭和16年（1941）、日本はアメリカ、イギリスに宣戦布告し、最後の、そして最大の戦争に突入しました。葉山町には、下山口の峰山に葉山高角砲台、長柄の二子山高角砲台と、木古庭畠山に高角砲台が作られました。これらの工事と補給物資搬入のため、軍用道路が整備されていきます。長柄の御霊神社の近くには精密部品の製造工場「青木工場（こうば）」が出来、横須賀市稲岡町にあった横須賀海軍省施設部が、現在の長柄小学校の麓（ふもと）（丹蔵谷（たんぞうやと）や十二天周辺）に移転してきます。戦争末期には直接軍事費が国の歳出の8割近くに達しました。そこまでのお金を注ぎ込んでも、勝算のない戦争であったといえるでしょう。

29 昭和時代



昭和22年の米軍撮影空中写真

米軍撮影空中写真を繋げた上に町境を重ねています。平成24年のものも載せました。



各時代の葉山の商店街

30 昭和時代

江戸時代の葉山は、浦賀、三崎奉行所へ通じる「浦賀道」、「三崎道」という2本の官道を有するエリアでした。葉山各地の商店街は、これらの街道を行き交う旅人や地域の需要に応えて形成されていったと考えられます。ここでは各地のかつての商店街を掲載しています。堀内⇩大正末期の海岸通り、一色⇩昭和初期の海岸通りと昭和36年の八店通り、長柄⇩昭和16年頃の長柄交差点付近、上山口⇩江戸時代から明治にかけての旧道筋、下山口⇩昭和36年頃の下山橋から葉山公園入り口付近、木古庭⇩昭和30年前後の旧浦賀道付近。

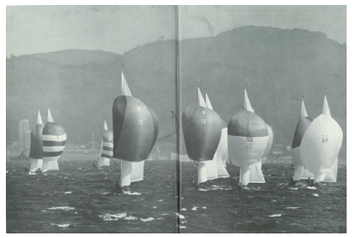
頼朝以来の別荘地・海水浴場の葉山

31 昭和時代

明治初期の海水浴といえば、健康増進のため 泳ぐのではなく、磯にさした鉄棒につかまって、海水に浸かり、海辺の新鮮な空気を吸う潮湯治（しおとうじ）でした。また、鎌倉に幕府を開いた源頼朝の御殿跡が江戸期堀内村絵図の森戸神社境内に描かれており、歴代将軍家は葉山の別荘を訪れ武芸鍛練をしたことなどが、『吾妻鏡』に記されています。鎌倉時代から「別荘地の葉山」は面目躍如たるものであったことがわかります。戦前の葉山では、地元の貸家に夏の間滞在した人々を「葉山族」と呼びました。昭和30年代から40年代は、海水浴が大衆化し、葉山の海水浴場は、どの浜辺も芋の子を洗うような状態となりました。

東京オリンピックと葉山

32 昭和時代



第18回夏季東京オリンピックは、昭和39年（1964）10月10日から近郊各会場で開催されました。葉山町ではヨット競技に出場した選手が活躍し、葉山町の名を世に広めています。ヨット競技は、このオリンピックのために建設された江の島のハーバーをヨット本会場とし、鐙摺の葉山港がサブ会場（本部船会場）となりました。一方、大会直前には、葉山町でも聖火リレーが通過しました。その後のオリンピックでのセーリング競技にも、葉山出身者が活躍しています。

新しいイベントの創設

文化人や要人から別荘地として愛されるなど日常を離れた保養地としてのイメージが強かった葉山ですが、近年ではその印象も変わり、むしろ「日常生活が楽しめる町」としての評判を確立しています。暮らしを盛り上げるのが、豊かな自然を背景に行われる数々のイベント。普段は静かな葉山の町にひととき活気を与えるだけでなく、町中の住民をつなぐ役割も果たしています。花火大会、「葉山ふるさとひろば」、「ビッグハヤママーケット」、「葉山芸術祭」各地の農産物や海産物を扱う朝市など、葉山をより住みやすく、楽しい町にするためにさまざまな人によって生み出されるイベントの数々―次の1ページを開くのは、あなたかもしれません。

草津町と豪州の市との姉妹都市提携

33 昭和時代

葉山町は群馬県草津町と、海外ではオーストラリアのホールドファストベイ市との間に姉妹都市協定を結んでいます。葉山が風光も良く、健康にも良いことを紹介し、御用邸をはじめとする別荘地となるきっかけを作ったドイツ人の皇室侍医ベルツ博士は、草津の温泉の効用を認め、温泉保養地づくりに貢献した人でもあります。両町は昭和44年（1969）に友好的姉妹都市協定を結び、草津町でのスキー、葉山海岸での親子連れの海水浴を楽しむ恒例行事を続けています。オーストラリア南部の海岸に面した風光明媚なホールドファストベイ市とは、ホームステイによる若者の相互交流を重ねて来ました。

葉山町における大規模団地の開発

34 昭和時代

1960年代にはじまった高度経済成長期にあわせて、葉山町でも増大する住宅需要を当て込み、相次いで団地開発がすすめられました。その始まりは1960年代初期の京浜団地（一色、堀内）と芝崎埋立地（一色）です。その後、分譲戸数1000戸を超える葉桜団地（長柄）、施工面積200万平米を超えるパーク・ド・葉山四季（一色）やイトーピア（長柄）など、あいついで規模の大きな団地が山野を切り開いて造成されていきました。その後、団地開発は凍結され、かつて取得した土地で、今は住民と手を携えて緑地の保全や人材育成をしているところに、大きな時代の転換を感じずにいられません。新たな町づくりは、すでに始まっているのです。

御用邸焼失と10年後の再建

35 昭和〜平成時代

昭和46年（1971）1月27日に御用邸は心ない青年の放火によって焼失しました。この大火事で、明治時代の創立から80年近く経った葉山御用邸は、御車寄せを残して全焼してしまいました。葉山町は直後に「御用邸再建推進会」を立ち上げ、再建に向けて活動を開始、新御用邸は、焼失から10年後に待望の完成を迎え、町民に対して落成のお披露目が行われました。今までの和風建築ではなく簡素な洋風建築の新御用邸を、多くの町民が、目にすることができました。

その後も、天皇皇后両陛下や皇室の方々は、たびたび葉山御用邸に行幸啓され、葉山の海辺や森の休日を過ごされています。

協働への試み——新たな町民活動盛んに

36 平成時代

同じ目的のために、対等の立場で協力し合うことを「協働」といいます。近年の地方自治では、まちづくり分野で不可欠の概念とされています。官民ともに地域の一員という立場で、それぞれが持てる力を出し合って、お互いに不足を補い合い協力して地域の問題解決に取り組み、協働のまちづくりを進めようという機運が平成7年（1995）の阪神・淡路大震災以降高まりました。「NPO法人葉山まちづくり協会」、「葉山まちづくり町民会議」、「逗子・葉山コミュニティ放送」通称「湘南ビーチFM」の例をあげました。

町の公共施設

37 平成時代

公共施設には役場や消防庁舎など、行政サービスの拠点となる施設をはじめ、学校や図書館、町内会館や児童館など日頃私たちが利用する施設などさまざまなものがあります。平成9年（1997）には人口がついに3万人を突破しました。こうした人口増加を背景に公共施設もさまざまに整備されてきました。ここでは、行政系施設、教育施設、社会教育施設、保健・福祉施設、子育て支援施設、環境関連施設、公園施設、その他の施設などに分類して、マップ上で紹介しています。

葉山に住んだ文学者・音楽家・画家たち

この町が「文化の町葉山」と呼ばれた理由の一つに、文化人が多く住んだことがあげられます。ここでは16名の主な文学者と音楽家、画家を紹介しました。

文学者は、堀口大學をはじめ6氏をとりあげています。葉山を訪れて、葉山を舞台に著された文学作品は、各時代を通じて数多くありますが、6氏は、葉山に住み、葉山を舞台にした作品を著しました。音楽家は、箏奏者で作曲家の宮城道雄、作曲家で葉山町歌も作曲した団伊玖磨、ジャズピアニストで作曲家の山下洋輔の各氏が葉山在住でしたが、いずれも、エッセイの名手で、葉山について書かれています。葉山の環境を好んだ方が多かったのか、たくさんの画家が葉山に転入し、永住したり、別荘を構えました。その中から、山口蓬春、奥谷博など7氏を載せました。奥谷氏以外は日本画家です。

寺社・教会・伝説など

葉山の神社——受け継がれる祭りや神事

葉山には古来、さまざまな神社が誕生し、古くは千年以上も前から受け継がれてきたと伝わる祭りや神事が、今も生きています。それらは歴史を知る上で貴重な資料であるとともに、住民同士を結び付けてきた民俗行事として継承された文化財の一つということができます。

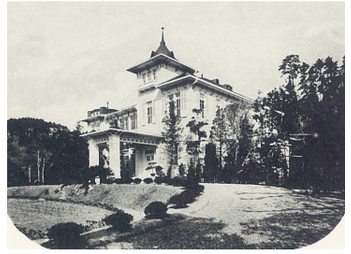
葉山の主な神社を、地区別に、これらの祭事とともに紹介します。取り上げたのは12の神社です。

葉山の寺——修験（しゅげん）、一家二寺（いっかにじ）制など

葉山は戸数に比して寺院の数が多い土地でもあります。特にその傾向が強い長柄地区では、「一家二寺制」が、旧家を中心に現在も受け継がれています。

また、一色の大峰山（おおみねやま）（三ヶ岡）をはじめ葉山の山々は修験道（しゅげんどう）の場であったとも推測されています。一色の「玉蔵院」などが、当時その中心だったといわれています。現在残る寺も、一つ一つが地域の文化や伝統を引き継ぐ貴重な場所です。ここでは、現存する葉山の主な18の寺院などを地区別に紹介しています。

葉山教会とイエズス孝女会葉山修道院



仙元山の中腹に十字架をいただいた白亜の建物は、キリスト教プロテスタント長老派の教会です。葉山唯一のキリスト教教会で、森に囲まれた教会の礼拝堂を含む平成12年（２０００）完成の建物は教会建築としても注目されています。国道１３４号線に沿った「あけの星幼稚園」は、カトリックの修道会、イエズス孝女会が運営しています。この地は、かつて東伏見宮別邸でした。大正３年（１９１４）建設の別邸洋館は、葉山に建てられた宮家別邸のなかで、建設当時の姿を残す唯一の建築物で、当時の宮廷洋風建築の雰囲気を保つものとして「かながわ建築１００選」にも数えられています。

猪俣（いのまた）・岡部（おかべ）、平兼盛五輪塔（たいらのかねもりごりんとう）の伝承

上山口、寺前の里に、「伝猪俣小平六、岡部六弥太両将の墓」と称する２基の五輪塔があります。この伝承について、古書は猪俣小平六の墓のみを伝えています。この２基の五輪塔は、享保４年（１７１９）、１００㍍南の川沿いから移された鎌倉初期のものです。ここからさらに下流へ約１㌔下った、平の里（たいら）と呼ばれる山間の小さな集落に、平安中期の歌人、平兼盛の墓と伝えます。先の猪俣・岡部両五輪塔があります。先の猪俣・岡部両将の墓と同じく鎌倉期のもので、凝灰岩（ぎょうかいがん）で作られた全高１２５㌢の五輪塔で、各部とも風化して不整形ですが風格のある立派なものです。近くで発見された中世の墓地などから領主の山口氏の供養塔なのではないかとも考えられています。

海辺の伝説　山辺の伝説

私たちは一口に、伝説や民話あるいは昔話という言い方をしますが、伝説は、たとえば路傍にある変わった形の岩石や老木、清い泉、ある特定の場所など具体的な事物に結びついて語られるもので、「昔々あるところに…」というように抽象的に語られる昔話（民話）とは区別されています。葉山にはどんな話が語り伝えられているのでしょうか。「鐙摺」「七桶の岩」「石芋井戸」「長者ヶ崎」「イヤダヶ谷」「地蔵さまになった古松」「寝子石（夜泣き石）」「五本松（小森坂）」「外道坂（下道坂）」「横向き如来」「三頭山」「峯山の大池」「蛇塚山（蛇骨山）」「不動の滝」「高祖井戸と高祖坂・鎌倉橋」など地名や葉山の人々が昔から親しんだ事物に関する伝説を集めました。

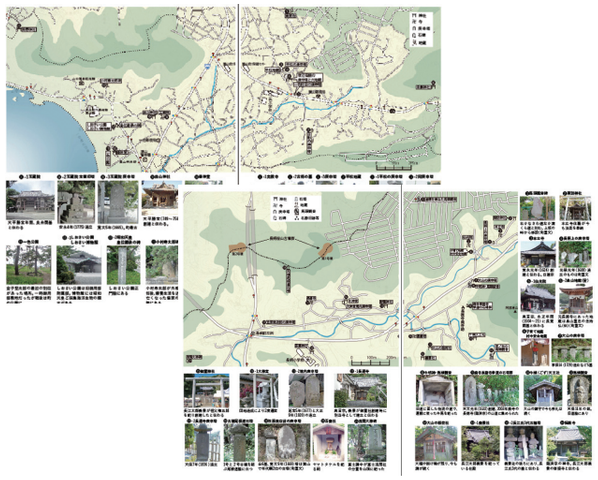
石碑・歴史巡りマップ

石碑いろいろ

一つの石碑が物語る事柄はさまざまです。彫られた文字から読み取れる記録はいうまでもなく、それが立つ場所からはその建造にまつわる人々の思いが見えてきます。石碑を訪ねることで葉山の歴史が生き生きと感じられるはずです。ここでは代表的なものをいくつか紹介します。天気のよい散歩日和の日にでも、ぜひ訪れてみてください。

堀内森戸神社境内から13基、堀内や一色から6基を紹介しています。

歴史巡りマップ――6地区



葉山6地区には、地元の人々の心のよりどころとなり、長い年月を刻んできた寺社・庚申塔・地蔵尊・伝説の石碑などが多く残っています。この地区別の6ページには、わかりやすいマップ上に、場所を明示して、歴史を巡る小さな旅のガイドをしています。

編さん関係者・参考文献一覧

編さん委員係者

鈴木昭二　田尾誠敏　高城通教　田辺彩　主笠文雄　東茅洋之助
横口政明　藤波勝次郎　安海尋幸　柳川義勝　山本真恭
吉田耕一　吉田八千代　若命三子一

葉山町町史編さん委員会

委員長　矢嶋道文
副委員長　伊東進　佐々木和子
委　員　石川外生　伊藤一美　鈴木雅子　内藤順子　中世貴三
　　廣岡宗紀　松元写生

町史編さん会議

鈴木雅子　伊藤一美　今井俊夫　小形克宏　浅木誠一
島田明子　内藤順子　渡辺尿紀　松元写生　矢嶋道文
池田宗吉　伊藤一美　今井俊夫　小形克宏　浅木誠一
倉持卓司　黒田雅子　鈴木茂也　鈴木雅子　渡辺尿紀
寺山ヶ子子　島田宗吉　内藤順子　渡辺尿紀
松元写生　森田昌明　矢嶋道文　山口正憲

編集

鈴木雅子　伊藤一美　今井俊夫　小形克宏　浅木誠一
島田明子　内藤順子　渡辺尿紀　松元写生　矢嶋道文
池田宗吉　伊藤一美　今井俊夫　小形克宏　浅木誠一
倉持卓司　黒田雅子　鈴木茂也　鈴木雅子　渡辺尿紀
寺山ヶ子子　島田宗吉　内藤順子　渡辺尿紀
松元写生　森田昌明　矢嶋道文　山口正憲

執筆

池田宗吉　伊藤一美　今井俊夫　小形克宏　佐藤芳朗
倉持卓司　黒田雅子　鈴木茂也　鈴木雅子　渡辺尿紀
寺山ヶ子子　島田宗吉　内藤順子　渡辺尿紀
松元写生　森田昌明　矢嶋道文　山口正憲

制作

服部一繁（装幀）　山下林（校閲）
山脇利雄（マップ原図作成）　池田宗子　小形克宏
鈴木雅子

事務局

葉山町総務課企画調整室
葉山町教育委員会教育課生涯学習課

資料を提供していただいた方々

葉仁親王紀久子殿下
株式会社紀社　神奈川県教育委員会　神奈川県立公文書館　共同
株式会社紀社　宮内庁書陵部　京急不動産株式会社　京浜急行電鉄株式
会社　宮内庁書陵部　逗子・葉山コミュニティ放送株式会社　大和
ハウス工業株式会社　真言院　中央大学大学史編纂課　東京国立
博物館　東昌寺　葉桜百田組合　葉山歴史研究会　葉山芸術家
行委員会　葉山町商業協同組合　葉山町土地開発公社　林式会社
日影茶屋　産業観光博物館　横浜市市民総務局総務課
NPO法人葉山まちづくり協会　NPO法人葉山ヨットクラブ
池田宗吉　池田雅生　石井豊彦　石川栄　石川弥生　伊東民文
大場俊義　久保木実　小山清治　鈴木茂也　鈴木雅明　鈴木進也
鈴木俊雄　鈴木孝子　高知道雄　柔田史朗　角田菊　嶋孝
長田支朗　田田義朗　田田栄子　熊谷稔　萩原敏　林敏男
葉山登吉　葉山政夫　堀口すみれ子　本多清広　水谷眞子
三井修　守谷ウメ　矢島明　矢嶋信平　矢部信一　吉田利夫

協力していただいた方々

宮内庁書陵部　長柄・桜山古墳をまもる会　葉山町文化財研究会
横須賀市立中央図書館　市川大二　岩間満茂子　大石十三夫　小沢朝江　片山
有本雅彦　市川大二　岩間満茂子　大石十三夫
義雄　加畑千鶴子　鰐部一　熊崎孝　国立宏宗　鈴木桂子

町制施行90周年記念
葉山町の歴史とくらし
平成二十七年（二〇一五年）一月一日発行
編集・発行　葉山町
郵便番号　二四〇―〇一九二（役場専用）
神奈川県三浦郡葉山町堀内二―三五番地
電話番号　〇四六（八七六）一一一一
©Hayama Town 2015, Printed in Japan
http://www.town.hayama.lg.jp/
印　刷　朝日オフセット印刷株式会社
神奈川県横浜市鶴見区本町通一―二二
価格　一五〇〇円（税込）

参考文献（略）

この90周年記念誌をお求めになりたい方は、葉山町役場、葉山町教育委員会、葉山町図書館、しおさい博物館、葉山文教堂、逗寺二宮書店、椿書房、池田書店などでお求めください。